



① 船舶が行き交う現在の鹿児島港

Back to

1907

「みなと鹿児島」の創造 〜鹿児島港〜

今も昔も鹿児島の
交通の要衝
鹿児島海の玄関口として
発展を続ける鹿児島港

鹿児島港は、きんのす 祇園之洲から平川までの南北約20キロメートルの地域に七つの港区を有し、関東地区や阪神地区、県内離島、沖縄、そして薩摩半島と大隅半島を航路で結んでいます。航路本数は日本一、乗降客数は第二位を誇る日本有数の大規模な港で、取扱貨物量は年間約4000万トンと物流拠点としても重要な機能を担っています。

歌謡曲の中でも歌われているほどの港町である鹿児島市は、古くから交通の要衝で、港とともに発展してきました。

鹿児島港の歴史は約670年前までさかのぼり、当初は現在の本港区付近から開港。江戸時代に入り、薩摩藩が大規模な整備事業を進め、海岸部を徐々に埋め立てて拡大していきます。県内各地の物産を大阪や江戸に送り出し、鎖国中も琉球を通じての貿易が行われていました。

明治時代になると物流が増大し、数多くの船舶や、大型船の入港を可能にするために大規模な改修が行われ、明治40年に「重要港湾」に指定されました。また、鹿児島駅が本港区近くに開業し、鉄道と海上交通が連

広告



②昭和30年代の名山堀近辺 ③垂水航路のボサド栈橋（昭和26年頃） ④桜島栈橋の可動橋落成（昭和40年12月）
 ⑤初寄港した豪華客船クイーンエリザベスII（谷山港：昭和54年3月） ⑥完成当時の鹿児島新港（昭和42年11月）

結したのもこの頃です。

物流拠点としての役割が増大するとともに、さらなる開発が進み、本港区や新港区のほか、昭和40年代までに中央港区（当初は南港区、木材港区）、谷山港区、鴨池港区が整備され、現在とほぼ同じ地形が出来上がりました。

鹿児島港発祥の地である本港区は、離島航路をはじめ、垂水航路・桜島航路の発着点として永らくにぎわっていましたが、港湾施設が手狭になり老朽化してきたことなどから、昭和57年に港湾計画を改定。再開発と離島航路の集約を行うとともに、港湾機能の高度化、県民や観光客が楽しみ憩えるウォーターフロントを目指して、昭和61年に再開発事業に着手しました。平成5年に北埠頭が供用開始され、フェリーターミナルや貨物関連施設が新たに整備されたほか、いおワールドかごしま水族館や複合商業施設ドルフィンポートも開業し、多くの県民や観光客でにぎわっています。

中央港区には広大な緑地空間を備えた「マリナーポトかごしま」が整備され、毎年国内外から多くの観光客船が寄港。新港区も岸壁の耐震化や旅客待合所の建て替えなどの改修工事に着手しており、平成25年度中の一部供用を目指しています。

このように鹿児島港は、時代に合わせて表情を変えてきましたが、本港区周辺には、今も江戸時代に築かれた防波堤や石づくりの倉庫群、「ボサド栈橋」「名山栈橋」のように当時の栈橋名を付した交差点など、往事の面影が残っています。

人・物・情報が活発に行き交う拠点として、また、県内外の方々が楽しみ、憩うウォーターフロント空間として、魅力ある南の拠点「みなと鹿児島」の創造を目指して鹿児島港は発展し続けています。

※北から本港区、新港区、鴨池港区、中央港区、谷山一区、谷山二区、浜平川港区

広告